

SESSION 2020

**CAPES
CONCOURS EXTERNE
ET CAFEP**

**SECTION LANGUES VIVANTES ÉTRANGÈRES :
JAPONAIS**

ÉPREUVE DE TRADUCTION

Durée : 5 heures

L'épreuve comprend une traduction et un exercice.

L'usage de deux dictionnaires unilingues en langue japonaise (un dictionnaire de langue et/ou un dictionnaire de kanji) est autorisé.

L'usage de tout ouvrage de référence, de tout autre dictionnaire et de tout matériel informatique ou électronique (dictionnaire électronique, ordinateur, téléphone, calculatrice ou autre) est rigoureusement interdit.

Si vous repérez ce qui vous semble être une erreur d'énoncé, vous devez le signaler très lisiblement sur votre copie, en proposer la correction et poursuivre l'épreuve en conséquence. De même, si cela vous conduit à formuler une ou plusieurs hypothèses, vous devez la (ou les) mentionner explicitement.

NB : Conformément au principe d'anonymat, votre copie ne doit comporter aucun signe distinctif, tel que nom, signature, origine, etc. Si le travail qui vous est demandé consiste notamment en la rédaction d'un projet ou d'une note, vous devrez impérativement vous abstenir de la signer ou de l'identifier.

Tournez la page S.V.P.

Les candidats traduiront en français le texte ci-dessous :

戦後五十余年を経て、「戦争体験を語り継ぐ」ことの重要性がますます叫ばれている。沖縄戦の語り部たちも今や七十歳前後の高齢となり、次世代への継承の課題は切迫感を帯びたものとなっている。例えば、ひめゆりの同窓生たちは言う、「戦争を知らない世代が人口の過半数を超え、戦争体験も風化しつつある今日、しかも、核の脅威にさらされる昨今の国際情勢を思うとき、私達は、私達の戦争体験を語り継ぎ、戦争の実相を訴えることで、再び戦争をあらしめないよう、全力を尽くしたいと思います。」と。しかし、このことばは果して未来の担い手である「教室」の生徒たちに届いているのだろうか。

5
10
そんな中、一九九七年度上半期の芥川賞を沖縄の若き作家、目取真俊氏の『水滴』が受賞した。自ら戦争体験を持たない作者による沖縄戦とその後の「五十年」の重さを一人の男の実存を通して描いた小説作品を、やはり「戦争を知らない世代」の教師としてさらにその下の世代の高校生が教室で読むことの意味を、この小論では考えていきたい。

15
20
沖縄修学旅行が一種の流行になっているようだ。特に、戦時中避難壕等で使われたガマ（自然洞窟）への集中が問題になっている。これは、それほどまでに平和教育が充実し追体験学習への生徒の関心が高まっているということの意味しない。実際に、ガマを案内するボランティア・ガイドグループ「沖縄平和ネットワーク」によれば、事前学習もせず、まるでお化け屋敷気分でガマに入ろうとする学校が増え過ぎて対応し切れないし、ガイドした後の虚しさからネットワーク自身の存続が危ぶまれるほどだそう。沖縄修学旅行の一つのモデルを作った丸木政臣氏の「私たちの『平和』学習のねらいは、最終的には子どもたちに『命どう宝』を体全体でつかませることだろう」と思っている。」というフィールドワークの実践から学ぶことは多い。一九九〇年に入ってから、私の勤務校でも試行錯誤を繰り返しながら、追体験学習を核にしたコースを組み立ててきた。生徒は、旅行終了後に作成する「文集」や総括会議の討論の中でひめゆり同窓生 M 先生の講演の感想やガマの印象を述べ、いかに修学旅行の前後で意識が大きく変化したかを発表したり、卒業してから再び個人的に沖縄を訪れひめゆり資料館で感想を書き留めてきたという OB や修学旅行が進路選択の決め手になったと語る三年生もいる。しかし、完成した「文集」を読み通してみると、どこか一本調子な実体のないことばの羅列に時として虚しさを覚えることがある。また、ガマにもぐって涙を流した生徒が、翌日伊江島に向かうフェリーの中で迷彩服を着た米兵を見つけるや否や駆け寄ってニコリピース写真を撮っている。こんなことも大体毎年のように見られる光景である。一体、なぜなのだろう。特に、米兵による少女暴行事件から、名護市の住民投票にいたる一九九五年から一九九七年にかけて、学年全体の責任者として沖縄修学旅行にかかわってきた私としては、自らの実践に対して懐疑的にならざるをえなかったのである。ここには、「戦争を語り継ぐ」とか「戦争の悲惨さを教える」といった力の作用——一方からもう一方への垂直な関係——では、捕捉しきれない死角が存在しているのではないか。

40
例えば、川村湊氏はひめゆり資料館の「平和教育」のある側面を「戦争の実態や事実を教えることとは別の次元で、感情的、情緒的なプロパガンダを無意識に行なっているのではないだろうか」と指摘する。さらに「戦争は『怖い』から嫌だという感情は、戦争は勇ましいから、美しいから、崇高だからという理由で戦争を賛美

- する論理に対して、本当に有効な思想的根拠となりうるか」という。川村氏のこの指摘は、加藤典洋氏の、東京の女子学生がひめゆり資料館を訪れた際のエピソードを受けてのものだが両氏の投げかけている問いは私たちが陥りやすい「平和教育」の陥穽を指し示しているように思える。さらに、加藤氏は女子学生の感想から「悲惨な体験を有りのまま語り継ぐ」というだけでは言葉が届かない現状があると分析し、「感じたところから考えることは始まる」し、そこからしか始まらないと言う。「戦争を語り継ぐ」「戦争の悲惨さを教える」等の垂直な関係からは漏れ出てしまふく自己>をどうく世界>と出会わせるかという点にこそ文学の力が要請されていると思う。そこに文学教育の使命もあるだろう。
- そして、文学教育もまた、「感じたところから考えることは始まる」という視点はゆるがせにできない。

(幸田国広「『五十年の哀れ』と向き合う——『水滴』(目取真俊)教材化の試み——」
(『日本文学』、48-2号、1999年)より抜粋、一部改変)

Les candidats traiteront en français l'exercice ci-dessous :

Proposez et discutez, de *manière contrastive* et en fonction des choix de traduction que vous aurez effectués, des pistes de traitement *en situation d'enseignement* des différentes occurrences des éléments linguistiques soulignés (il n'est pas demandé d'effectuer une analyse complète de chacune des occurrences prises isolément).

INFORMATION AUX CANDIDATS

Vous trouverez ci-après les codes nécessaires vous permettant de compléter les rubriques figurant en en-tête de votre copie.

Ces codes doivent être reportés sur chacune des copies que vous remettrez.

► **Concours externe du CAPES de l'enseignement public :**

Concours	Section/option	Epreuve	Matière
E B E	0 4 3 0 E	1 0 2	3 4 4 8

► **Concours externe du CAFEP/CAPES de l'enseignement privé :**

Concours	Section/option	Epreuve	Matière
E B F	0 4 3 0 E	1 0 2	3 4 4 8